

黒い光による救済者

九つの大罪

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年、黒光子 理央は今の仕事・・・否、世界に不信感を抱いていた。
そんな時とある出来事が彼を生まれ変わらせる。
ヒロアカのヴィランサイド物でございませう。

内なる感情

一人の少年

荒宮 理央（あらみや りお）はこの社会・・・否、世界に不信感を抱いていた。個性という力が生まれ、様々な個性持ちが現れははじめて超人社会となった。

そんな社会には二つのカテゴリーがあった。

ヒーローとヴィランである。

一般的にはヒーローは正義の味方。ヴィランは正義の敵。であろう。

時には例外もあるが・・・

しかし、理央の中ではそんなものはなかった。

ヒーローもヴィランも同じ存在・・・ともに力を持ち、ともに欲を持ち、ともに愚か

だ・・・

理央の中にあるひーヒーローとヴィランの存在とはこういうものだった。

ヴィランは様々な悪事をおこない、時には他人のすべてを奪いすべてを終わらせる。

そんなヴィランをヒーローは阻止し捕まえる。

しかし、無茶苦茶だろうと云わせてもらおう。

ヒーローだってそんなヴィランの人生を奪い終わらせているじゃないか。

身を守るための攻撃、ヒーローは正義の為の正当防衛。ヴィランは破壊の暴力
結局は同じ暴力・・・それがヒーローとヴィランとでカテゴライズされている。

違いはなんだ？ 違いなんてないだろ。なのにどうして良し悪し分けられる？

ヒーローだから正義？ ヴィランだから悪？

本当にくだらない。

そもそも・・・そもそもだ。

どんなに正義感に溢れていようと、どんなに悪意に染まっていようと。

どんなにかっこよくても、どんなにカッコ悪くても。

どんなに真面目でも、どんなに不真面目でも。

どんなに希望を望んでも、どんなに絶望に魅入られても。

どんなに正直でも、どんなに？ つきでも。

どんなに力があっても、どんなに力が無くても。

どんなに天才でも、どんなに馬鹿でも。

どんなに好きでも、どんなに嫌いでも。

どんなに異常でも、どんなに特別でも、どんなに普通でも、どんなに過負荷でも。

どんなに意味があっても、どんなに無意味でも。

したって、一度腐り始めたら止まることはない。

犠牲・生贄・・・そんなものを出したところで意味はない。

すべてを壊し、何もかもを消し去り、また初めから再生させていった方がいいに決まっている。

創造は破壊からしか生まれない。

悪には正義を・・・ではなく、正義と悪にはそれを超越する正義と悪を……………。

それが理央の中にある考えだ。

しかし、実行するタイミングはない。

そんな中、この後起こる出来事が理央を動かすきっかけだった。

出来事・・・きつかけ 序章

堀須磨大附属中学校

とある場所

「八百万さん、好きです！付き合ってください!!」

「申し訳ございません。私はプロヒーロー・トップヒーローとなる為にも殿方と付き合いうのはまだ考えておりませんので。」

「だったら俺とコンビを組んでください！俺の個性と八百万さんの個性が協力すれば向かうところ敵なしですよ！」

「・・・慢心するわけにはいきませんので・・・申し訳ございません。」

教室

「八百万さん、また断ったみたいですね。」

「仕方ありませんわ。私は雄英に通うつもりですので引越しなければなりませんもの。」

「堀須磨大附属中学校一のアイドル・マドンナの八百万さんが違う高校に通うと知って

から今のうちに繋がり、もしくは結びたいと躍起になっているでしょうね。まあ、気持ちからは分からなくないですけど」

「けれど限度と慎みを持つてもらいたいものね。」

女性が集うと華やかな空気が不思議と流れるような気がする中、どこか大人びて落ち着いた様子の八百万は友人たちと先程の事を変に騒ぐことなく話に花を咲かしている。「だけで成績優秀、スポーツ万能、プロモーションも抜群、家柄も問題なし、天は二物を与えずと言うけど、逆に与えられたような才女、そうそういないわよ。」

「八百万さんに見初められた殿方は幸せかもね。そんな殿方がいればだけど。」
「ちよつと、私はプロヒーローになるまで殿方と付き合う気はありませんわ。」

「じゃあ、付き合うとしたらどんな人がいいの？」

それまで少し騒がしかった空気が一気に静まり返った。そして八百万と関係を持ちたい男共は皆、聞き耳を立てる。そんな男共のあからさまな行動に冷たく軽蔑する白い目で見る。

「どんな人が良いと仰られても……………」

「こんな感じの人がいいなーって人がいないわけじゃないでしょ？実際に好きになる人とは違う訳ですし。」

「……………そうですね。八百万さんの殿方の好み……………気になりますね。」

「・・・・・・・・まあ、好み云々とか聞くまでもないと思うけど・・・・・・・・」
何人かは期待に満ちた眼差しで八百万を見つめるが一人だけ何やら含みのある言い方で少し場を濁した。

「・・・・・・・・聞くまでもないと仰いますと?」

「だって・・・・・・・・八百万さんの気になっている人って言ったら・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ああ、確かに。」

「私としたことが・・・・・・・・盲点でしたわ。」

「確かに・・・・・・・・聞くまでもなかったわね。」

「まあ、分かってはいましたけど・・・・・・・・」

「やっぱり・・・・・・・・少し遊びたくなりますよね。」

『確かに。』

まるで練習したかのような言葉の流れに八百万は呆氣にとられる。

「・・・・・・・・何が言いたいんですか?」

「だって・・・・・・・・八百万さんの気になる人って・・・・・・・・」

『理央さんでしょ?』

「な、な、な!?!?／／／」

ガタタツ!!!

友人たちに特定の男の名を言われ解かりやすい感じで動揺する八百万とその行動で
凶星と知った八百万狙いの男共の動揺が見てわかる。

「なんで理央の名前が出るんですか!?!」

「それよそれ。普段の八百万さんは男女ともにさん付けするのに理央さんにだけ理央つて呼び捨てじゃない。」

「それに理央さんの前だと今みたいな敬語じゃなくなるし。」

「表情もどこか楽しそうだし。」

「というより嬉しそう。」

「もはやリア充レベル」

「男子の目から血の涙レベル」

「お、幼馴染だからですわ!!」

「いやいや、もはやその域を超えているように見える。」

『全くもってその通り。』

「~~~~~!?!/~/」

女性陣 『おお。顔真つ赤。』

男性陣 『複雑だけど可愛らしい!!』

男子・女子の言葉に八百万は自分の弁当を持ち駆け足で教室を出た。

正確には逃げた。

「・・・やり過ぎたかしら？」

「からかい過ぎたかも・・・」

「でも・・・面白かった！」

『それは同意!!』

女性陣は楽しそうに笑っていた。

屋上

そこには一人の少年、先程から話題の八百万の幼馴染、荒宮理央が誰かと電話していた。

「・・・問題はない。だが、もう少しだけ時間をくれ。」

『』
「・・・ああ、これが最後のつもりだ。」

『』
「分かっている。」

ピッ

「……………フウ。……………ん？」

バン!!

「ハア……………ハア……………ハア……………」

「……………何やってんだ？百。」

通話を終わらせ、一息ついていたところに勢い良くドアが開けられそこには顔を赤くした幼馴染、八百万 百が息を切らした状態でいた。

「……………何でもありません。」

「顔が赤いはどうした、息切れしているみたいだが……………熱か？」

「な…ん…で…も…あ…り…ま…せ…ん!!」

「……………そ、そうか。弁当持つてるみたいだし……………昼食にするか。」

八百万の今の状態の訳を聞こうとしたら謎の気迫で言い放ったので、理央は少々呆然とし、深く追及することを止め話題をそらした。

その後落ち着いた八百万と昼食をとりこの時間を過ごした。

出来事・・・きつかけ 事件

学校が終わり、俺と百は共に帰っていた。

ついでに買うものもあつたので買い物をしている。

「そう言えば理央はどこ的高校に行くのですか？」

「・・・ああ。そのことか、・・・そのことだがまだ決めてない。」

「雄英には行かないのですか？」

「・・・保留中だ。」

そう言いながら二人で買い物をさつきと済まそうと急いだ。

「・・・百、ちよつと先に行つてろ。」

「え？何かあるんですか？」

「・・・察しろ。生理現象だ。」

「!!し、失礼いたしました。!!／／／」

百は顔を赤くして先を急いだ。

さてと、

「・・・いい加減に出てきたらどうだ。分かりやすい尾行なんかしやがって、おまけに下

手な殺意も向けやがって。」

百がいなくなつて後方を向いて警告するとゾロゾロと男共が出てきた。

よく見てみるとうちの学校の制服だな。

「なんのようだ。」

「単刀直入に言う。八百万さんから離れる。もしくは消えろ。」

コイツら・・・大方百に思いを寄せているんだろう。

「・・・俺にメリツトがない。大体、百に断られたんだろ？お前ら。」

「気安く八百万さん呼び捨てにするな!!」

・・・うるさい奴だ。

「お前がいるから優しい八百万さんが断るんだよ!」

「お前がいなくなれば八百万さんは解放されて俺たちを見てくれるんだよ!」

「これは警告なんだよ。さっさと八百万さんの前から消えろ!」

「・・・断れば?」

「ここでお前を痛めつけて二度と八百万さんに近づけないようにするだけだ。」

「どうせ今頃は他の同士が計画を進めている頃だろうしな!」

「バカ!余計なこと言うな!」

「良いじゃねえか。どうせこいつをここでボコるんだから。」

そう言いながら各々の個性を出し始め、臨戦態勢に入る者。何か言い争いしている者
といた。

・・・こいつらだけじゃないとは思ったが・・・やっぱりな。

それにしても・・・見ていて不愉快だな。百をどうするか・・・というより、こいつ
らの浅ましくもくだらなく、ちっほけな欲望に。

そんなちっほけな欲望の為に授かった個性・・・力を使おうとする目の前のクズ共に。
・・・さっさと済ませよう。

場所は変わりとする倉庫

薄暗く鎖の音がジャラジャラと鳴り響き、空間内でこだまする。

「貴方達こんな事して許されると思ってるんですか!!」

「怒った顔も魅力的ですねえ。八百万さんは。」

「もう少しの辛抱ですよ八百万さん。」

「今頃俺たちの仲間が黒光子の奴をボコってここに向かつてくるだろうな。」

手足を鎖で拘束されている八百万を下種の視線で見る男共

それを鋭い目つきで睨み返す八百万

しかし、内心では焦りと心配で溢れていた。

先程の理央の行動は襲うメンバーが近くにいることを見抜いて自分に心配させないようにしていたことに気付かなかった自分に情けなく、理央ならそう簡単にやられないとは思っていてもやはり不安に思うものだった。

「(理央・・・どうか御無事でいてください。)」

八百万がそう思い願っていると、入口の方からカツン、カツンと足音が響いてきた。

八百万は理央がやって来たと思ひ。

男共は仲間が戻って来たと思っていた。

しかし・・・この時どちらも思ってもみなかった出来事に言葉が出ず、息をのんだ。やって来たのは理央一人だった。

だが、その場にいる誰もが目を疑った。

本来黒い髪の理央が白い髪だったのだ。

しかも瞳の色も変わっており血のように紅い真紅の瞳になっていたのだ。

更に、理央の右手には一本の刀が握られていた。その刀の先からポタ・ポタ・ポタ・ポタ・

と赤い液体が流れていた。

異様な姿の理央の登場に深い沈黙が続いたが男共の一人が理央に向かって何かを言おうとした瞬間、突如理央の姿が目の前から消えた。

沈黙から動揺に変わる中、八百万と男共の背後でザクツと音が響いた。

振り返るとそこには先程声を発しようとしていた男と消えた理央がそこにいた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

理央が男の心臓部を刀で刺し壁に刺し込んでいる光景がそこには

あった。・・・・・・・・

『!!?』

その光景を見て皆が驚き理解出来なかった。

理解が追い付かない中再び理央が姿を消した。

再び動揺が広がる中、ザシユ・・・ザシユ・・・ザシユ・・・と音が鳴り一人、また

一人と切られ血を吹き出し倒れていく。

いくら何でも追いつかない思考も一つの答えがまとまった。

このままでは確実に殺されると・・・。

『う、うわあああああああああ!!!』

一人一人殺されていくことに恐怖した者共が悲鳴を上げ逃げようとする。

しかし、そんな者もまた簡単に殺されていく。

八百万は目を疑い混乱していた。

目の前の惨劇についていけないのだ。

何が起こっているんだ。これは夢なのか、はたまた現実なのか。アレは自分の知っている理央なのかと。

そう思い続けているなか、とうとう大勢いた人はたった一人になりその男の目の前に白い髪の自分の身体に返り血一つ浴びず、刀にべつとりと血が付着している刀を持つ幼馴染・・・理央が立っていた。

辺りは血に染まり、文字通りの血の海が広がり出来上がっていた。

「な、なんなんだよ・・・なんなんだよ!!お前!!」

残った男が叫ぶ。

「なんでこんなことするんだよ!!確かに俺たちは八百万さんを拉致したよ!!お前をボコるためのメンバーを向かわせたよ!!お前から八百万さんを奪うつもりだったよ!!だけ

ど．．．だけど!!殺す気はなかったよ!!なのに．．．なんなんだよお前!!!
男が理央に向かって怒涛の声を荒げる。

しかし理央はそんな男を冷たく、汚らわしそうに、つまらなさそうに、喜怒哀楽の感情などもないと感じさせるように、睨み付けるわけでもなく、ただただ、無心で見つめていた。

「．．．．．つまらないことを聞くなよ。」

沈黙のなか静かに理央はそうつぶやいた。

「そんなつまらなく、くだらないことを聞くなよ．．．．理由は簡単だ．．．生贄だよ。」

『!!?』

理央の呟きに男と八百万は驚愕した。

「お前たちが今回の事をしでかしてくれたおかげで吹っ切れた．．．迷いがなくなつた．．．やはりこの世は腐っている．．．．．こんなくだらなく、しょーもない欲の為に個性を．．．力を無駄に使うお前らがひどく醜くて、汚らわしくて、惨めで、愚かだから．．．こんなバカが蔓延る世界なんて．．．必要ないって理解したからだ。だから．．．お前たちには感謝しているよ．．．そのお礼でな．．．これで俺が何をすべきか分かったから．．．その新しい自分のための生贄だよ。お前らは。」

理不尽過ぎる。

混乱する八百万はそう思った。

男の方も理不尽だと思い抗議の声を上げようとした。

しかし、その声を聴くことはなかった。

キンツという音が鳴り、理央は刀を鞘に納めた。

納めたと同時に男は真つ二つに切り裂かれた。

八百万は呆然と理央を見つめていた。

すると、理央はこちらに近づいてきた。

八百万の中では助けてくれた喜びはなく、恐怖一色で染められていた。

こわい・・・こわい!!

そう思っていると手足が急に軽くなった。

どうやら気付かぬうちに鎖を切ってくれていたらしい。

呆然とする八百万に背を向けて理央は歩きだした。

「もう・・・これで、白い光らしいことはお終い。」

理央はそうつぶやいた。

八百万はその言葉の意味が理解できなかったが・・・理央がどこか、自分の手が届かない場所へ行ってしまうような気がした。

「待って下さい!!理央!!!」

八百万の叫びに一度足を止めた理央は振り返り・・・

「さようなら・・・・・・八百万さん」

そう答え、再び背を向け歩きだし、八百万の前から姿を消した。

残された八百万は涙を流し泣き叫んだ。

たった一人の鳴き声が倉庫の中で、虚しく、儂く、無情に響いた。

出来事・・・きっかけ その後

あの事件の後の話

堀須磨大附属中学校では大量の男子生徒が行方不明との噂、報道が流れた。

理央が殺した男子生徒の遺体や血はあの事件の後、何者か、はたまた何物かによつて綺麗に処理されていた為、警察やヒーローがヴィランによる大量殺人とは思つてもいない。

行方不明者の中には当然、理央の名前があつた。

八百万はあの事件の事を警察やヒーローはおろか自分の家族、理央の家族にも今回の理央の事を話してはいない。

普段の八百万なら間違いなく報告しているはずなのだが・・・

心の中では自分の不甲斐なさや理央の行動が信じられずにいたからだ。

「私があの事件の事を報告していないのは間違い・・・それは分かっています。しかし・・・理央の事を話せば当然理央のご家族がもつと悲しみ、さらに責められてしまう。」

八百万は理央の家族の事を思い、本当のことを言えずにいた。

そのこともあるが、八百万はいま、自分の不甲斐なさに悔いていた。

あの事件の日までずっと……ずっと……一緒に時を……時間を過ごして
いながら、理央の異変・思い・考えに気づかずにはいたことを……。

自分は雄英に行くことばかりに気を取られ、理央を見ていなかったことを……。
あの時の理央を止めることが出来なかったことを……。

あの時、理由はどうかあれ助けてくれた理央に恐怖を感じてしまったことを……。
八百万は理央が去る瞬間を思い出し再び悲しみがこみ上げてきそうになった。

『さようなら……八百万さん』

あの時の理央の言葉が蘇る。

普段から百と呼び捨てにしていたがあの瞬間だけ八百万さんと他人行儀で読んだ理
央を。

今となつてはアレが別れの為だと理解できた。

このまま……このまま……こんな形で別れでいいのか？

いや、よくはない。

だつて……私は……理央のことが……。

『気になつている人つて理央さんでしょ？』

事件の前の友人たちの言葉が頭の中で響く。

「私は……理央の事が……好き。」

そうだ。理央の事が大好きだ!!

溢れ、零れ落ちそうな悲しみを抑え、八百万は決心する。

理央を止め、取戻し、救い、また一緒に過ごすことを。

「落ち込んでなんかいられませんわ。・・・私は・・・私は・・・諦めたくない!!」

八百万の顔・目には、さっきまでの悲しみはなく・・・決心のある顔へと、諦めない真っ直ぐな瞳へと変わった。

「待っていて、理央。私は・・・貴方を・・・必ず取り戻して見せる!!」

今ここに一人のヒーローを目指す者が誕生した。

side 理央

理央は今、とある場所にいた。

その場所は薄暗く、灯といえれば無数の映像が流れているモニターによる光と少し離れた所にある巨大な液体の入ったカプセルの妖しい光だけだった。

モニターに映るのは様々な人々があるジュースを飲んでいる光景だった。

「君のおかげで【ガイアジュース】は順調に売れてドンドン広がっているよ。」

モニターの前に一人の女性がモニターを視ながら理央に語る。

さして興味のない理央はそうか。と静かに応える。

理央の反応に特に気にすることなく女性は振り返り理央の姿を視ながら更に語り続ける。

「流石はジョーカーだよ。ガイアジュースは我々の計画のためでもあり、ビジネスのためでもある。素晴らしいモノをあみだしてくれて、スポンサーとしても有り難いよ。」

「……誰がジョーカーだ。勝手に人に妙な呼び掛けをするな。」

「おや？ 気に入らなかつたかい？ しかし、君は我々の計画のキーマンでもあり切り札でもある。ピッタリだと私は思うけどね。」

女性はクスリと笑い理央に近づく。

理央は女性を睨むが特に身構えること無く自身が持っていたガイアジュースを飲む。

「計画は問題無く進んでいるよ。既に何人かは此方に向かっているし。気づいた者も此の地に向かっている。顔合わせも近いうちにするだろう。その後も集まって来るだろう。」

女性はそう理央に告げ、理央が持っていたガイアジュースを手に取り飲む。

・・・・・・ここから、理央の悪の物語が始まる。

Cristo ークリストー

【ライフメーカー】

超常黎明期、社会が超常に対応しきれていない混沌の時代に、圧倒的な力・計画的な悪行で瞬く間に悪の支配者として君臨する・・・という存在、【オール・フォー・ワン】同様に裏社会に君臨する・・・という都市伝説な存在。

死亡説があってもなお、確信を持ち畏れられていた。

「・・・信じられないな。」

集まったメンバーの一人が呟く。

それもそのはずだろう。

いきなり現れて、自分が伝説の存在だと言われても信じろというのが無理だろう。

「大体、仮に本人だとしても黎明期からの存在だろ？何故生きている？」

確かに・・・超常黎明期からの伝説。声は機械音声などでどうとでもなる。だが肉体は別だ。黎明期から今の今までもつわけがない。

☒ 「フム。まあ・・・無理もない。しかし私は本人さ。二代目やら機械仕掛けのサイボーグとかいうものじゃない。・・・簡単に言えば・・・個性による不老不死モ

ドキさ。」☒

「!？」

不老不死……だと？

☒ 「モドキだと言っただろ？私の個性は「生と死」(ライフ&デッド) っといつてね。強力な生命力と死を司る個性なんだよ。私自身が死んでも死の個性で死体の状態でも会話で生生の個性で活動できる。もう死んでいるから歳なんて関係ないしね。」☒
どこか軽く話すライフメーカーに俺たちは呆気に取られた。

☒ 「さて、私のことはこのくらいでいいだろう。そろそろ君たちの事を話してくれないかな。」☒

「……………」

軽い個性の説明だけだろ……。本質を見せない存在だな。

仮面男以外の全員がどこか釈然としていないみたいだった。

そんな沈黙のなか、仮面男が最初に沈黙を破った。

「それでは、僭越ながら私から……。私の名は「能未統真」(のうみ とうま)。コードネームは《サイコ》個性は「記憶操作」です。以後お見知りおきを。」

「……………」【黒須繁介】(くろす けいすけ)。個性は「五感」。コードネームは《アンチ》で通す。」

「望美願魔璃」(のぞみね まり)。個性は「ヴァリユアブルジャック」。コードネームはそうね……。《サバト》とでも名乗っとくわ。」

「剣魔神」(けんま じん)。今は《怪剣クロード》と名乗っている。個性は「金属変殻」(トランスフォーム)だ。」

「……。大神白夜」(おおがみ びやくや)。今は名を捨て《探シ者》として行動している。個性は「絶対空間」・「細胞再生」の二つだ。」

「宇崎瞳」(うざき ひとみ)。個性は「獣王」(じゅうおう)。コードネームは《ブルー》だ。」

「……。黒光子理央。個性は「黒い光」・「超越」・「MDR」の三つ。「……。コードネームは《リライト》だ。」

それぞれの自己紹介が終わり、理央と白夜に視線が集まる。

それもそうだろう。基本的に個性は一人一つというのが普通だ。

それを二つ三つ持っていることが特殊なのだ。

視線は好奇心・驚愕・物珍しいものを見るといった感じであり、視線が集まっている二人はイラつき始める。

☒「さて、自己紹介も終わったし本題に入ろうか。」☒

全員の視線がモニターに向く。

☒ 「早速だが、君たちは今の社会もしくは世界をどう思っている？」 ☒
 『腐っている・醜い・ウソくせえ・偽善の塊』

ライフメーカーからの問いに意見はバラバラだが全員が即答した。

☒ 「・・・素晴らしい。全員が私と同じ考えだよ。」 ☒

顔を仮面で覆っているので表情が読みづらいがライフメーカーは喜びを表していた。

「・・・今のが本題か？だとしたら聞くだけ無駄だ。大体大方ここに集まった連中は今の社会に牙を？くことを考えている奴等だろう？そんな連中同士で交友深めるために集めた訳じゃないだろう？」

探シ者がイラつきながら尋ねる。

「・・・キツカケは一年前に届いたムービーメール。」

『!!』

理央、もといリライトが静かにここに集まったわけを振り返る。

それに全員が反応した。

「そこにいるサイコがムービー付きの添付メールを送信してきた。そのムービーを開いた瞬間・・・今の今まで感じていた社会への不信感が増幅され、さらに個性が今までとは違うように感じられた。」

「それは俺も同様だ・・・それと同時に無意識にセーブされていた個性の真の能力

を理解したんだ。」

「確かに。一年前までは個性の真髓が理解できなかったのよね。」

「でもメールを見てから個性の真髓をフルに引き出す方法を理解することができたんだよね。」

クロード、サバト、ブルートが同意の意見を述べる。

残りのメンバーも頷く。

「しかしその後は放置。連絡することはあれど特にどうこうすることはなく俺たちに自由気ままに個性を使わせ続けた。そして今日……これがこの招集の実施。……何、この『機は熟した』感？酷く不愉快だ。」

リライトの言葉で全員がサイコ……正確にはライフメーカーを見る。

☒「……OK、全て話そう。これまでの経緯、そして私自身のことを……」☒
ライフメーカーは語った。

超常黎明期に知り合った親友が時代が流れ、一人のあるヒーローに敗れ去った。それからの世界は酷く不快だった。

巨悪を倒したヒーローに憧れ多くのヒーローが生まれた。しかし、ほとんどのヒーローはハッキリいって偽善や欲の塊、そして……英雄気取りの贗者でしかなかった。

金・性・名声の為に活動するものがほとんどだった。

更に、正義や平和のために活動することが世間では正しい事と言われているが、実際の正義は嘘くさく、薄っぺらく、脆いものだった。

とある戦場にて繰り広げられる戦争。

片や主義主張の為と無差別テロを続けるテロリスト。片やそんなテロリストの制裁という正義を掲げ、人殺しにやって来た連中。

これをどっちが悪だと思う？ 答えはどちらも悪でしかない。

正義の名において増えていく犠牲・・・これが正義か？ いや、悪でしかない。

だからといって罪のない者を殺す権利は誰にも存在しない。

しかしそんなことが本気でまかり通るものならば・・・この世に悪など生まれはしない。

正義は悪から生まれるものというが・・・光があるからこそ闇が生まれる。

悪に至っては惨めだった。

巨悪が消え去った後、蔓延る悪はちっぽけな欲の為に動くものだらけだった。

金・快楽・嫉妬・復讐・力を見せびらかすだけで行動する存在だけで、信念・想い・仁義といったものは全く存在しない。そんな連中しかこの世に蔓延っていない。

悪戯に恐怖や絶望を与えるだけのちっぽけな存在になってしまった。

しかし、最も問題なのは人そのものだった。

力無き者は力有る者を讃えるが、高すぎる力・スキルを持つと憧れや尊敬は恐怖へと変わり、力を持つ者を排除しようとする。

力有る者が敗北者になれば励ますどころか見限り、責めたて、見捨てる。

力有る者が力無き者を守れど、命の危機に晒されれば、力無き者は我が身大事と力有る者を責めたてる。

力有る者は力無き者を力で捻じ伏せて、優位になり、力無き者を見下し支配する。

力有る者は自身を過大評価し身勝手な行動をする。

そんな世界に酷く不服感を抱いたライフメーカーは世界が間違っていることを証明し新たに創り直すために反旗を翻したことを決意する。

腐ったものが周りに影響を及ぼす前に腐ったものだけを排除するのではなく。

その全てを排除し、新たな世界を創り出すことを……………。

「……………自尊心と復讐心……………実に人間的だな……………」

「それで俺たちのような連中を集めて行動開始しよう?」

「……………悪いけどあたしらは集まりはしたもののアンタの部下になるつもりはないよ。」

アンチ、探シ者、ブルートが答える。

☒「……………いや、それは違うよ。ブルート……………私達の間には上下関

係はない。その行動や言動に縛りはないさ。簡単にいえは我々は同志さ。だが、一つの

信念より複数の信念が集えばより素晴らしい世界が創れると思つてね。．．．各々好きに．．．自由に動くといひさ。．．．来るべき【再世の日】までね。」☒
『．．．．．』

その後、リライト達は解散した。

しかし．．．．．すぐに全員が再集結した。

あの瞬間、一つの信念に魅了されたのだ。

今ここに、一つの新たなる組織。

【C r i s t o】ークリストーが誕生した。

Cristo 現在メンバー個性紹介

黒光子理央

ヴィラン名：リライト

個性：黒い光・超越・MDR

黒い光

・生物や無機物に浴びせると怪人、モンスターになる。ただし、理性のあるなしがある。

・黒い光は理央の意思で自由自在に操作可能。

・黒い光には浴びた瞬間に怪人・モンスター化するものは理性がなく理央に絶対服従。人間体と怪人・モンスター体オンオフ出来るものは理性があり、鍛錬次第で黒い光を強化出来る。

現段階では理央は第三フェーズまで可能。

第一フェーズ：身体の色と瞳の色が変化する。この時点では身体能力が倍増するレベル。理央の髪・瞳の色は基本黒、第一フェーズで髪は白く、瞳は真紅。

個体によって変化は様々。

第二フェーズ：第一フェーズの状態で部分怪人・モンスター化。

第三フェーズ：身体能力倍增+怪人・モンスター化。姿は個性がモチーフとなる。例えば、サメの個性ならサメをモチーフにした姿になる。

・さらに黒い光は対象の中に留まらわせることでヒーローと異形型以外の個性を自分も使える。ただし、対象の個性を理解してないと使えない。例えばオール・フォー・ワン身体の超強化といったような理解だと発動できない。

留まらせている対象が死んだり、黒い光を追い出すと個性は消える。

蓄えられる個数は最大で3つ。

・黒い光には物理攻撃は効かないが、炎や水といった自然系の攻撃は通用する。レーザーも可。

超越

・対象者の個性を増幅させる。例、ツバサの個性は鋼のツバサに変わる。

・増幅させ過ぎるとオーバーヒートして自滅する。

・対象者に手をかざさなければ発動しない。対象が動けば増幅したエネルギーはリセットされる。

・この個性を発動している間は他の個性は使えない。

・使い過ぎるとしばらくの間、腕がマヒする。

M D R

- ・物質分解&再構成能力
- ・物質・物理攻撃は効かない
- ・人は分解できるが再構成することはできない
- ・武器やアーマー系の服は分解・再構成できるが、繊維は分解・再構成できない。
- ・オーバーヒートすると睡眠する。スリープ時は24時間は絶対、ひどい場合は一週間くらいスリープする。

ライフメイカー

本名：不明

個性：生ライフ&デッドと死

- ・生は生命力、死は文字通り死
- ・生命力の個性で意思のあるカラクリ人形が生み出せる。男女両方生み出せるが基本女性型が多い。

- ・生命力の個性で疲労、オーバーヒート気味の状態を元の状態に戻すことができる。
- ・カラクリ人形でも可。その場合、条件は口移し。

・ 強大な生命力なので、軽い怪我はすぐ治る。

・ 死の個性であらゆる生物を死へと誘う。しかし、一瞬で死ぬことはない。

・ 死という強大な個性なので、普段は死体の状態にいる。動くこともできない。生命力の個性で会話はできる。

・ 大量の生命力を吸収すると24時間だけ元の身体に戻る。つまりは生き返る。

このことは現在秘密にしている。

・ 死の個性は命を具現化して、取り出すことができる。取り出された対象は死ぬことが許されない。つまりはアンデッド状態になる。具現化した命を元に戻せばアンデッド状態はなくなる。

また、死に掛けの状態でも命を具現化できるが、生きている時と違い、命を元に戻せば身体は朽ち果てて死ぬ。

具現化した命は自分の中に入れることができるが、あくまで他者の命なので、自分の命を増やすわけではない。

今のところこの力を使うつもりは本人にはない。

能未統真

ヴイラン名：サイコ

個性：記憶操作

- ・対象者の記憶を操作する。
- ・洗脳とは違い、記憶を一時的に消したり、封印したりする。
- ・記憶喪失レベルまでの記憶操作はできない。
- ・対象者を認識していなければ発動できない。
- ・記憶操作のオンオフはできるが、本人が気を失えば個性は解除される。

黒須繫介

ヴイラン名：アンチ

個性：五感

- ・自身の五感を通常の倍に強化できる。
- ・他者の五感を自分の五感に共有できる。技名は五感リンク
- ・五感リンクによって個性の発動の過程を共有し、対象者の個性の特性を学習した上で、五感に干渉すれば個性の発動を邪魔できる。つまり、個性無効化が可能。この能力は対象者ひとりだけにしか発動できない。

・他者の五感を支配し、幻覚などをみせて惑わせくるわせる。技名は五感ハック

・他者の五感を奪う。技名は五感ジャック

・リンク・ハック・ジャックは複数人でも発動可能

・対象者を認識しなければ発動できない。

・オーバーヒートすると目が見えなくなり、身体が動かなくなる。少し休めば回復していく。

望美願魔璃

ヴィラン名：サバト

個性：ヴァリユアブルジャック

・対象の大切なものを奪う個性

・奪うといっても対象自身からではなく対象者の周りから奪う。

例えば、何かを成し遂げるために時間が欲しいと願ったり、望んだりする対象者に個性を発動すれば、対象者以外の存在の時間が止まる。つまり、対象者は時間を手に入れたことになる。

といったかたちである。

・対象者以外の存在は対象者に関わる存在だけであり、関わらない存在からは奪われない。

・奪うものには命・個性は含まれない。

・オーバーヒートすると24時間小人サイズになる。

サバトは誰かの大切なものは素敵なものと考えており、そんな素敵なものを集めたらもつと素敵なものができる。

それは崇高なことだと考えている。

サバト自身の目的は現段階では謎。

劍魔神

ヴイラン名：怪劍クロード

個性：金属変殻《トランスフォーム》

・金属を吸収して、武器やアーマーを創り出す。

・機械系のものの一部を吸収し、機械と一体化するように創ればどんな機械も操作可能。

・オーバーヒートすると自身が金属化する。もちろん動けない。

大神白夜

ヴィラン名：探シ者

個性：絶対空間・細胞再生

絶対空間

- ・ 空間を空間ごと瞬時に消したり足したりできる。
- ・ 簡単にいえばゲーム盤のマスが消したり足したりする。
- ・ 空間を切断することもできる。
- ・ 空間を圧縮しぶついたり、重力のようにすることもできる。

細胞再生

- ・ 細胞を再生し傷を治癒する。
 - ・ 触れていれば他人の傷も治癒できる。
- オーバーヒートすると24時間人形サイズの白いドラゴンになる。

宇崎瞳

ヴィラン名：ブルート

個性：獣王

・ 声帯から特殊音波を発して動物を遠隔操作できる。

・ 人の頭脳と獣の力を併せ持つ獣人になれる。

なれる獣人は様々。瞳の基本獣人は《ラーテル》

オーバーヒートすると24時間獣人《ラーテル》時のヌイグルミスタイルになる。

悪意・同盟

Cristoが結成されてから一年が経過した。

一年間各メンバーはそれぞれの行動をしていた。

能未はライフメーカーの指示で様々な情報収集、闇ブローカーとの交渉などをしていく。

黒須・劍魔・深シ者はそれぞれの個性で様々な事をしている。

余談だが深シ者は大神と呼ぶとキレるので深シ者と呼ぶようになった。

望美願は相変わらず自分の好きに行動している。

野本は非法法の地下闘技場で己の力を高める事と資金稼ぎをしている。

理央は個性の黒い光をばら撒き、新たな怪人・モンスターを生み出したりちよつとした実験をしたりしていた。

そして現在、理央は……

「オールマイト……平和の象徴を殺す……ねえ。」

「ああ、それにお前は興味ねえか？殺したら名が挙がるぜ。」

「是非ともあなたにご協力願いたい。」

悪意は悪意を引き寄せる。

理央は今、ヴィラン連合のトップ。死柄木弔・黒霧と接触していた。

事の始まりは少し遡る。

理央が黒い光の力により生まれた怪人・モンスターを見つけ見極める事が大体一段落したところで次の場所へ向かおうとした瞬間、歩みを止め、目の前の空間を睨む。

睨んでいた空間から黒い霧が出現した。

黒い霧はある程度広がると中から光る眼らしきものが現れた。

「お初にお目にかかります。【邪光のリライト】。」

黒い霧は次第に人型になりながら話しかけてきた。

【邪光のリライト】

誰が呼び始めたかは知らないが理央を個性の一部を見て次第に呼ばれ始めていた。

「・・・なんだ、お前。」

「失礼しました。私は『ヴィラン連合』の黒霧と申します。」

黒霧と名乗った黒い霧はスーツをきた人型へと姿を現した。

「・・・で、そのヴィラン連合とやらが俺に何の用だ。」

「ここでは何なので我々のアジトへ向かいましょう。誰に聞かれるかわからないので。」

黒霧はそう言うのと両腕を広げ黒い霧を広げてゆく。

やがてそれは、理央の身体を包み込む。

「・・・登場から考えると転移系の個性か。」

「ええ。そのまま動かないでいてください。転移します。」

黒霧の言葉と同時に目の前が暗くなり、浮遊感が感じられた。

暫くすると、浮遊感はなくなり、目の前の黒い霧が晴れる。

目の前に広がるのは、先程の場所とは違い、どこかのバーであった。

「よお。先輩。」

声のした方を見るとそこには全身を黒で統一した服をきて、両腕・両胸・両肩・首・後

頭部・顔に手を付けた男がいた。

「・・・俺はお前みたいな後輩を持った覚えはない。」

「ヴィランとしての先輩ってことだよ。」

手男は答える。

「俺は死柄木弔。まあ、よろしく。」

死柄木は自己紹介をして理央に握手を求める。

「……………リライトだ。」

理央はヴィラン名を答えるが握手はしなかった。

「……………なるほどね。警戒心が高いな。」

死柄木はそうつぶやくと手を引つ込めてカウンター席に座る。

黒霧はいつの間にかカウンターに立っておりカクテルを作っていた。

「単刀直入に言いましょう。……………リライト。貴方をヴィラン連合に歓迎します。」

「……………何?」

理央は突然のことに理解できなかつた。

「歓迎だと。俺をか?」

「ああ、そうだ。」

死柄木は簡単に答えた。

「……………目的は何だ。」

「なあと。簡単なことさ。俺たちヴィラン連合はヒーロー社会の壊滅が目的でな。その一歩として、まずはヒーローの有名校である雄英学園を襲撃する。」

「!!」

「そこでオールマイトを殺す。そして雄英の生徒も何人か殺す。気に入らないものは全部ぶつ壊す。」

「……………その後はどうする。片っ端から壊していくのか?」

「まあ、そうだな。」

理央はハア……………とため息を吐いた。

「……………くだらない。聞くだけ無駄だったな。」

「はあ?」

「ただ破壊するだけ……………それに何の意味がある。……………結局、お前らも個性をつまらん欲に使う愚者でしかないか。」

「何言って……………っ!!」

「!!」

死柄木は理央に何を言っているのか聞こうとしたが最後まで言えず、動くことができなかった。

黒霧も同様に動くことが出来なかった。

死柄木と黒霧の全身を無数の棘が突き付けられていたのだ。

しかも、その棘は死柄木と黒霧の周り全体から飛び出していた。

この一年間、理央は黒い光の個性は頻繁に使っていたが、残りの二つの個性はあまり使っていないかったのだ。

それ故に、C r i s t oメンバー以外の者は理央の個性は黒い光だけと認識していた

のだ。

突然のことに死柄木と黒霧は避けることも防ぐことも出来なかつた。

「・・・理想や信念もなく、つまらん理由で破壊にはしる・・・つまらない欲で動こうとするからこうなる。」

「おいおい。リライトの個性は一つだけじゃないのかよ!?!」

「どうやら複数の個性持ちだったみたいですね。・・・動けない!」

身動き取れない二人に理央は静かに告げる。

「つまらない欲の為に個性を使う奴なんざ・・・邪魔なだけだ。・・・死ぬ。」

無数の棘が一気に突き刺そうとした時。

「!!。ちよつと待て・・・この掌は駄目だ・・・殺すぞ」

「!!」

「お前の方こそ随分つまらない事を言うなア。・・・信念?理想?・・・んな仰々しいもんなんかないな・・・強いてあるとすれば・・・そうだな・・・オールマイトだ・・・」

死柄木は腕を棘に引っかかろうと構わず上げ、顔に付いた掌にあたろうとする棘を掴み、ボロボロと個性で壊した。

「あんなゴミが祀り上げられているこの社会を・・・祀り上げる奴等も・・・全部

壊して・・・滅茶苦茶にブツ潰したいとは思っているよ。」

ゾアア!!

「ツ!!」

理央は死柄木から発せられる狂気に一瞬圧され、個性が緩む。

その隙に死柄木は個性で自身と黒霧の周りの棘を破壊した。

「話は無しだ。・・・帰れ。消えろ。」

「・・・・・・・・それが今のお前か。」

「ああ?」

「俺とお前の考えは多少相容れないだろうが・・・・・・・・『全部壊す』・・・・・・・・この一

点だけは俺もお前も同じのようだな。」

「知るかよ。死ね。」

そんな死柄木を見て理央は興味を持った。

「・・・・・・・・今はまだ未完成といったところか・・・お互いまだまだ上にイける段階の

ようだな。」

理央は息を吐き死柄木に答えた。

「・・・・・・・・ヴィラン連合に入る気はないが・・・協力、同盟ならしよう。・・・雄英

への襲撃計画。俺も参加しよう。」

「入らないのかよ．．．こんな奴がパーティーメンバーとして行動するなんて嫌だね俺は．．．」

「死柄木弔。彼が加われれば大きな戦力になる。交渉は一応成立した。」

「ただし、条件がある。今回の計画には俺の配下を何人か連れてくる。そいつらの指示は俺がする。」

「．．．．．別に構わないさ。こつちには切り札があるしな。」

邪悪な悪意には邪悪な悪意を引き寄せる。

今ここに、コレから先、幾度となく恐怖を巻き起こす組織が同盟を結ぼうとしていた。

とある場所

死柄木と理央を映したモニターの前に一人の男がいた。

「フフツ．．．．．親友に訊いた通りの人物だな．．．弔に合わせて良かったよ。」

男はモニターに映る二人の様子に笑みが浮かぶ。

「我々は自由に動けない．．．だからこそ、弔や彼のようなシンボルが必要なんだ．．．．．死柄木弔!! 黒光子理央!! 君たちという恐怖を世に知らしめろ!」

今ここに、
新たなるシンボルを
生み出そうとする者が
いるが、それを
知る人は知る由
もない。

雄英襲撃

とある倉庫

そこには大衆が創られていた。

そのほとんどがヴィランとはいえ路地裏に潜んでいるようなチンピラ集団。

そんな集団の中で一際存在感が違うヴィランがいた。

一人は【ヴィラン連合】のトップ。

全身黒い服で、全身に手を付けた細い男 死柄木弔

一人はヴィラン連合のナンバー2。

スーツを身に纏う黒靄の男 黒霧

一人はヴィラン連合の切り札。

筋骨隆々で脳が丸見えの大男 脳無

一人はヴィラン連合と同盟を結んだ【Cristo】のメンバーが一人。

黒い色に所々金色の紋章らしきものが施されている服に黒い毛皮コートを羽織って、
刀を持つ男 《邪光のリライト》こと 黒光子理央（ゲキレンジャー：リオの衣装）

更にこの四人よりは存在感が小さいが周りのチンピラ集団よりは大きい存在が六人

いた。

そのうちの二人は全身黒色の服にフードを深く被り、顔を見せない。

一人は黒い革ジャンをきた長髪の男。

一人は赤い服に口元にピアスを付けたスキンヘッドの男

一人は脳無に比べればたいしたことないがそれなりにガタイのいい男

一人は羽衣を身に纏う女

この6人は死柄木が集めたチンピラ集団とは違い、理央が連れてきた黒い光によって生まれ変わった配下だ。

・・・時は満ちた。

先程の10人以外のチンピラ集団は今か今かと待ち望んでいる。

「・・・黒霧、ゲートを開けろ。さっさとゲームを始めよう。」

「もう開いていますよ。死柄木弔。」

死柄木が語りかける前に黒霧はゲートを開いていた。

「この向こうは既に雄英だ。たとえ生徒とはいえ気を抜くなよ。」

「・・・お前たちもだ。・・・第一フェーズまでなら許可する。」

『了解。』

いよいよ始まる。

ヴィランによる恐怖と絶望の闇が．．．悪が．．．魔の手が．．．ヒーローとヒーローの卵に向かって．．．。

ヴィラン連合、雄英襲撃．．．始動。

相澤SIDE

今回のヒーロー基礎学は人命救助一レスキュー訓練。

俺と十三号。そして、オールマイトの三人体制で指導するはずだったが、オールマイトは制限ギリギリまで活動したらしく遅れてくる．．．．．不合理の極みだなオイ。

まあ．．．．．念の為の警戒態勢．．．そこまで神経尖らせることはないだろうが．．．
13号が生徒に小言を言い終えたか。．．．．．さっさと始まるか。

ズズ．．．

．．．．．？

中央広場の方から妙な感じがするな。

相澤が気配のする方を見てみると小さな黒い靄みたいなものが出ていた。その靄は次第に大きくなっていく。

ある程度広がった靄から見えたのは顔に手を付けた男の顔。それから感じられるのは途方もない悪意だった。

「一塊になって動くな!!」

「え?」

俺の声に生徒からは疑問の声が漏れるが気にしている場合じゃない!

「13号!!生徒を守れ!!」

相澤の叫びが合図のようになったのかヴィラン達は次から次へと姿を現しだした。

「何だアリア!?また入試ん時みたいなものもう始まってんぞパターン?」

「動くな!!あれはヴィランだ!!!」

ドンドン出てくるヴィラン達。

「13号に……イレイザーヘッドですか……先日頂いた教師側のカリキュラムではオルマイトがここにいるはずなのですが……」

靄型のヴィランの言葉に理解できた。

やはり先日のマスコミ乱入はコイツ等の仕業だったか

「……何らかの変更があったか遅れて来るんじゃないのか?……あの話が正し

ければの話だな。」

「どこだよ……せっかくこんな大衆引き連れてきたのにさ……オールマイト……平和の象徴……いないなんて……子供を殺せば来るのかな？」

主犯と思われるヴィランの中の一人には見覚えがあつた。

ここ最近名が挙がってきたヴィラン。

《邪光のリライト》!!

あんな奴までいるのか!!

相澤SIDE END

【平和の

象徴を

殺せ】

「ヴィランンンン!!?バカだろ!?!」

「ヒーローの学校に入り込んでくるなんてアホすぎるぞ!!」

突然のヴィラン襲撃に生徒は騒ぎだす。

それもそうだろう。プロヒーローが集う雄英にまさかヴィランが乗り込んでくるな

んて夢にも思わないだろう。

慌てる者もいれば、冷静に今の状況を分析している者もいた。

そんな中、突然のヴィラン襲撃にも驚いているが、それ以外のことで、もしかしたら襲撃のこと以上に驚いている者がいた。

ポニーテールの少女。八百万百である。

八百万は襲撃メンバーのヴィランの一人を見て、目を見開いて息を飲んだ。

いずれこうなる時が来ることは覚悟していたが……。

運命の悪戯か、あるいは必然か……。

彼女の瞳に映るのは一人の少年だった。

小さい時から共に過ごした彼が……。

幼馴染の彼が……。

一年前のあの出来事から自分の前から姿を消した彼が……。

光から闇へと姿を消してしまった彼が……。

自分が改めてヒーローになることを決意したキツカケの彼が……。

止めることのできなかった彼が……。

自分が愛していることに気づいた彼が……。

愛している彼が……。

逢いたかった彼が……。

探し続けた彼が……。

彼が……。

黒光子理央がそこにはいた。

「理央……。」

八百万は涙を流すのを我慢して、愛しの彼の名を小さく呟いた。

ここに今、運命の悪戯による予想よりも早い、ヒーローになる八百万とヴィランになった理央が再開する舞台が創られた。

「?……百?」

そんな八百万を近くにいた耳郎は八百万の呟きと今の彼女の状況に少し違和感を感じた。

「13号!生徒を守って避難させろ!!」

相澤は13号にそう伝え本来の彼、つまりヒーロー:イレイザーヘッドのスタイルになりヴィラン達に向かって行つた。

イレイザーヘッドは個性を消す個性と自身の武器である捕縛武器とヒーローとしての戦闘経験で次々とヴィラン達を倒していった。

「皆さん!早く避難してください!!急いで!!」

生徒を任された13号は急いで生徒を避難させようとした。

しかし……

「そうはさせませんよ。」

「逃がさん。」

それをヴィランが簡単に許すわけもなく。13号と生徒達の前に黒霧と理央が連れてきた黒い革ジャンの長髪の男が姿を現した。

「初めまして、我々はヴィラン連合。僭越ながら……この度ヒーローの巣窟。雄英高校に入らせて頂いたのは……平和の象徴オールマイトに息絶えて頂きたいと思つての事でした。」

（理央様……いや、今はリライト様か。……と俺たち6人は違うけど……この際流れは任せるか。）

『!?!』

黒霧の言葉に皆が驚愕の顔になる。

「本来ならばここにオールマイトがいらっしやるはず……ですが何か変更があったのでしょうか?」

「まあ……それとは別に……俺たちの役目は……ッ!!」

話の途中で長髪の男は元居た場所から姿を消した。

それと同時に13号が個性を発動しようとした瞬間・・・

「オラアアアア!!」

「死ねえええええ!!」

二人の生徒、切島と爆豪が個性を発動して黒霧に攻撃したため、13号は個性を発動できなかった。

「ベラベラとうるせえ奴等だな!!」

「その前に俺たちにやられることは考えてなかったのか!？」

二人の攻撃はヒットしたように見えたが・・・。

「危ない危ない・・・」。「ジャンパー」。攻撃してくると読んでいるなら一言お願いしますよ。」

「悪かったな黒霧さんよ。しかし・・・優秀な金の卵の生徒の割には血気盛んな奴等だな。」

黒霧には何のダメージも受けておらず、先程消えた男・・・ジャンパーと話をしていた。

「ダメだ!どきなさい二人とも!!」

13号が二人を下がらせようと叫ぶが・・・

「もう遅い。」

時すでに遅し。

「邪魔な生徒は……」

散らして

嫩り

殺す

黒霧による黒い霧は生徒を一気に包み込んだ。

これから始まる。

ヒーローの卵対ヴィランのそれぞれのバトルフィールドでの戦いが……
幕を開ける!!

雄英襲撃 それぞれのフィールド

水難ゾーン

緑谷SIDE

靄型のヴィランの黒い靄に飲み込まれて目の前が真っ暗になり、晴れると目の前には大量の水が広がり、迫っていた。

ここっつて水難エリア!?

水の中に落ちた僕は混乱する頭の中で整理できることから整理していった。

(入口にいたのに水難エリアにいるってことは、あいつの個性はワープ系の個性か!! それよりオールマイトを殺す!? 一体どうなっているんだ!?)

「来た来た!!」

混乱する中、声が聞こえ気が付くと目の前には半魚人みたいなヴィランがいた。

「ボガアアア!!」

「おめーに恨みはないけど・・・サイナラ!!」

ヴィランは口を大きく開けて僕に迫ってくる。

まずい!! 正せさえ個性のコントロールがまだ上手くいかないうえに水中じゃあっち

の方が有利だ!!

迫りくるヴィランにどう対処するか考えていると、突如ヴィランの追撃を阻止した者が現れた。

蛙吹さんだ!彼女の個性は【蛙】!水場なら彼女の独壇場だ!

「緑谷ちゃん!」

蛙吹さんは舌を伸ばし僕に巻き付ける。

そしてヴィランを思いつ切り蹴り、その場から離脱した。

「サイナラー!!」

「サイナラ」

水面に出た僕たちは水難エリアのセットの一つの船に避難した。

ここにいるメンバーは僕と蛙吹さん、峰田くんの三人。

船に周りにさっきのヴィランとは別のヴィランが船を囲んでいた。

そもそも奴等は何でオールマイトを殺したいんだ?

悪への抑止力となった人だから・・・?

ていうか・・・今は理由なんて・・・

知るか!!

「僕らが今すべき事は・・・。」

緑谷SIDE END

「戦って・・・阻止する事一勝つこと!!」

土砂ゾーン

轟SIDE

黒い靄ヴィランの個性で入口から土砂ゾーンにワープされた俺は土砂ゾーンに待機していたヴィラン共を個性で凍らせた。

「子供一人に情けねえな。・・・しっかりしろよ、大人だろ？」

「っ・・・!」

それにしても・・・

「散らして殺す・・・か」

俺は今呆れている。

「言っちゃ悪いがあんたらどう見ても、個性を持て余した輩以上には見受けられねえよ。」

「コイツ・・・!!移動してきたとたんに・・・!!」

「本当にガキかよ・・・いつててて・・・」

俺はさっすきの主犯格のヴィランの言葉を思い出す。

（オールマイトを殺す．．．初見じゃ精鋭を揃え数で圧倒するかと思つたが．．．）

フタを開けてみりゃ俺たち用のチンピラの寄せ集め．．．．．

見た限りじゃ本当に危なそうな人間は4、5人程．．．となるよ。

「なあ。このままじゃアンタらじわじわと壊死していくわけだが．．俺もヒーロー志望。そんな事はなるべく避けたい」

俺が次にとるべき行動は．．．

「あのオールマイトを殺れるつっう根拠．．策つて何だ？」

情報を得て対処することだな。

「ツ!!．．．．し、死柄木さんと黒霧さんが連れてきた脳無っていう奴が切り札らしい．．．．後は．．．じゃ、邪光のリライトさんが実行するらしい．．．と。」

【邪光のリライト】

確かここ最近名を上げてきたヴィランだったな。

俺はもつと聞き出そうとすると．．．

「ツ!!」

ドゴオオオオ!!

俺と質問に答えていたヴィランの間に一人の男が攻撃してきやがった。

「まったく．．．．ヴィランならヴィランらしく黙って死ぬとかしろよ．．．簡単

に情報をしゃべりやがって……」

そこにいたのは理央が連れてきたガタイのいい大男だった。

(何だコイツ………何で動けるんだ?)

「ク、クオイオさん。………!?ガハッ!?」

突如現れたクオイオと呼ばれるヴィランは先程まで轟の質問に答えていたヴィランをいきなり腕を振るい破壊した。

「……簡単に情報を喋る奴なんて……リライト様の妨げにしなければならないから………別に必要ないな。」

クオイオの行動と言葉に轟は驚き、残りのヴィラン達は顔が青くなり恐怖する。

自分たちも答えていたらあぁなつてしまうと理解する。

「………いつまで驚いている?」

「ツ!!」

クオイオは一瞬のうちに轟の間合いに入っており轟を殴る体制に入っていた。

轟は後れを取ったものの間一髪でクオイオの攻撃をかわした。

「俺の使命は今回の目的とリライト様の邪魔をする者の排除だ。」

クオイオは轟を見て静かに己の使命を告げる。

「だから……お前は……ここで排除する。」

轟はクオイオを見て理解する。

コイツはチンピラの寄せ集めとは違うこと。

理屈は知らないが自分の個性が簡単には効かないことを。

コイツを倒さないと先に進めないことを。

轟 S I D E

山岳ゾーン

八百万 S I D E

靄型のヴィランの個性で私・耳郎さん・上鳴さんは山岳ゾーンに来ていました。

そこには多くのヴィランがおり、私たちを取り囲んでいました。

私は耳郎さんに武器を創り、私も剣を創りヴィランに迎え撃つ。

上鳴さんの個性はあくまで電気を纏うだけで放電はできるみたいですが電気そのものを操ることは出来ないみたいですし・・・急がなければ!!

それにしても・・・今回の事に理央が関係しているなんて・・・。

だけど、このことは理央自身の意思なのでしょうか？

あの時の事を考えると理央が行動する理想とは少し違うような気が・・・。

・・・。今は耳郎さん達のサポートを!!

「できました!!」

「へ!？」

八百万の言葉に耳郎は理解が追い付かなかった。

「大きなものを創造るのは、時間がかかってしまいますので。」

そう言うのと八百万は身体を少し伏せる。

すると彼女の背中から巨大なシートが出現した。

巨大なシートは八百万と耳郎を包み込む。

「暑さ100mmの絶縁体シートです。上鳴さん!!」

八百万の言葉に上鳴は瞬時に理解した。

「なるほど!これなら俺は・・・クソ強え!!」

『ぐああああ!!』

上鳴は自身に纏った電気を一気に放出し、周りにいたヴィランを一気に倒した。

「さて・・・急いで他の方々と合流しましょう。」

「百・・・服が超。パンクに・・・つか、発育の暴力・・・」

「また創りますわ。」

「うエ~~~~い」

「!!」

上鳴は許容オーバーしてしまったので脳がショートしてしまった。

八百万が新しい服を創造している最中に耳郎は八百万に自分が気になっていることを聞いた。

「あのさあ、百・・・ちよつと聞きたいんだけど・・・」

「?何でしょうか耳郎さん・・・!!」

耳郎の質問を聞こうとした八百万は突如、耳郎の腕を引っ張りその場を離れた。

バシイイイ!!

先程まで二人がいた場所に白い帯が叩きつけられた。

「全く・・・たかがガキ三人に情けないシ。これだからチンピラ連中は困るシ。」

『!!』

八百万と耳郎は声のした方を見た。

そこには、身体に白い布を纏い、羽衣のようなものを纏っている女性がいた。

「ウチの名前はシキガミ。お前たちに恨みはないけど、リライト様の為にここで死んでもらうシ。」

八百万はシキガミと名乗る女性がリライトと言ったことに反応した。

おそらくリライトとは理央の事だろう。

理央に会って話をしなければ!!

そのためには………目の前のヴィランを倒さなければ!!
八百万SIDE END

倒壊ゾーン

切島SIDE

黒モヤヴィランに倒壊ゾーンに飛ばされた俺と爆豪。

倒壊ゾーンにいたヴィラン達は俺たちが飛ばされてきた途端に襲ってきやがった。

といっても実力はそこらのチンピラと対して変わらない感じだったから数を除けば俺たちの敵じゃなかったぜ。

「これで全部か。弱えな。」

あらかたヴィランを倒した俺たち。

流石に多かったから息切れ気味だぜ。

「っし！早く皆を助けに行こうぜ！俺らが先走った所為でこんなことになったんだ。男として責任取らねえと……」

「行きてえなら一人で行きやがれ。俺はワープゲート野郎と革ジャン野郎をぶつ殺す

！」

「はあ!!?」

俺の話の最後まで聞かずにトンデモ発言する爆豪に俺は驚き呆れる。

「この期に及んでガキみてえなこと言うなよ！大体革ジャンはともかくワープゲートの奴に攻撃は効かねえだろ!？」

「うっせ！敵の出入口だぞ。いざって時に逃げださねえように元を締めとくんだよ！・・・モヤの対策もねえわけじゃねえ・・・!」

二人が話している隙に残っていたカメレオン型のヴィランが姿を消し二人に近づき、爆豪の背後に回った。

(ペチャクチャダベリやがって！その油断が・・・)

ヴィランはナイフを持ち爆豪に襲い掛かる。

「っーか」

しかし爆豪はそれを難なくかわし、ヴィランの頭を掴み個性の《爆破》を発動した。

「生徒」おれらに充てられたのがこんな三下連中なら、大概大丈夫だろ。」

(すげえ・・・反応速度・・・)

「っーかそんなに冷静な感じだったかおめえ?」

普段はもつとこう・・・死ぬ!!連発してる感じだよなコイツ。

「俺はいつでも冷静だクソ髪やろう!!」

「ああ。そつちだ」

これだよコレ。

これでこそ爆豪だ！

俺はいつもの爆豪にホツとする。

「じゃあな。行つちまえ。」

「待て待て！ダチを信じる．．．！漢らしいぜ爆豪!!ノったよおめえに！」

ダチじゃねえ!!と叫ぶ爆豪を無視して一緒に行動しようとする切島。

すると、突如二人の目の前にスキンヘッドの男が現れ、爆豪に襲い掛かろうとしていた。

爆豪は突然の奇襲に一瞬不意を突かれたが、すぐさま男の顔を掴み爆破した。

爆破により生じた爆煙に相手の様子は分からないがコイツもそこらの奴等と同じだと爆豪と切島の予想は次の瞬間大きく外れた。

なんと、爆煙の中から突如腕が伸び爆豪の顔をお返しばかりに掴んだのだ。

そして、爆豪からの反撃の隙を与えることなく男の姿が現れたと同時に、爆豪を地面に叩きつけた。

叩きつけられたことにより男の顔から爆豪の手が離れる。

男の顔には顔のような奇妙な痣が一つ浮き出ており、その痣からは『一発目』と静かに告げられた。

「爆豪!!」

俺は個性の《硬化》を発動してスキンヘッドに攻撃したが、スキンヘッドは難なくかわし、俺と爆豪から距離を取った。

「爆豪!!大丈夫か!？」

「ウツセエ!!クソ髪!!」

俺の心配をよそに爆豪は起き上がりスキンヘッドを睨み付ける。

対するスキンヘッドも俺たちを静かに見つめているがスツと腕を上げ、爆豪を指さす。正確には爆豪が付いている腕の籠手を指していた。

「それ・・・いいな・・・俺にくれよ。」

「ああ!!?」

スキンヘッドの言葉にキレて今にも飛びかかる勢いの爆豪を俺は何とか抑える。

「落ち着けて爆豪!!よくわかんねえケドアイツのはおめえの爆破が効いてねえんだぞ!!」

「関係ねえ!!アイツもぶつ殺す!!」

荒ぶる爆豪をよそにスキンヘッドは更に告げる。

「戦利品として頂く。」

スキンヘッドの言葉に爆豪は更に暴れ、俺の抑えを振り切りスキンヘッドに突進して

いった。

ああもう!!やる気やねえ!!

切島SIDE END

入口

黒霧SIDE

私の個性で生徒を全員飛ばしたつもりでしたが・・・

「13号はともかく・・・案外残ってしまいましたね。」

「問題はないと思うがな。13号はプロヒーローとはいえ救助専門。残りの生徒もさっきの飛びかかってきた奴等を含めて、勢いのある奴等はいなさそうですし。」

私の意見にジャンパーはナイフを取り出しながら答える。

確かに・・・何ら問題はなさそうですね。

残った生徒の様子を見てみませんが散り散りになった生徒の事を考え落ち着きがない者が多いみたいです。

「サツサとこいつ等を殺し一片付けましょう。・・・本命は別なんですから。」

「ええ。そうですね。」

私とジャンパーは臨戦態勢をとる。

「ツ!!・・・委員長!君に託します。この事を学校に知らせてください。」
「!!」

「警報鳴らずの上に電話も圏外。恐らくそれらを妨害可能な個性持ちがどこかに潜んでいるでしょう。それを見つけ出すより君の個性で駆けた方が早い!!」

「しかし!クラスの皆を置いてなど!!」

「行けって非常口!!」

「外にさえ出られりや追っっちゃ来れねえよ!!おまえの脚であいつらを振り切れ!!」

「救う為に個性を使ってください!!」

「サポートなら私達超するから!!」

「お願いね委員長!!」

13号と生徒のやり取りに私とジャンパーは呆れる。

「微笑ましくも美しい友情劇だな・・・..だけど。」

「手段がないとはいえ・・・敵前で策を語る阿保がいますか」

私とジャンパーは同時に13号と生徒に向かう。

「バレても問題ないから語ったんでしようが!!」

13号は個性を発動しますが・・・それが命取りです。

中央広場

理央SIDE

イレイザーヘッドの個性で次々とチンピラヴィランどもが倒されていく。

「肉弾戦も強く……その上ゴーグルで目線を隠されたら「誰を消しているのか」分からない。集団戦においてはそのせいで連携が後れを取るな……成程……嫌だなプロヒーロー。有象無象じゃ歯が立たない。」

首を掻きながら分析していく死柄木。

俺の両隣に待機している二人が動こうとするが俺はそれを静止する。

「……だが、おかげでいろいろと理解できてきたな。」

「……ああ。」

俺と死柄木は会話を交わすと同時にイレイザーヘッドへ駆け出した。

「本命か！」

イレイザーヘッドは俺たちが動き出したことに気付き、自身の武器を俺たちに向けたが……俺には意味がないな。

俺はイレイザーヘッドの武器を切り裂き、死柄木は「2.3秒。2.4秒。2.0秒。」と眩きながらイレイザーヘッドに近づいて行った。

イレイザーヘッドは瞬時に近づいてきた死柄木に肘を入れたがそれを死柄木は手でガードした。

「動き回るので分かり辛いけど、髪が下がる瞬間がある。」

死柄木が触れているイレイザーヘッドの肘は少しずつ死柄木の個性により崩れていく。

「二アクション終えるごとにその間隔は段々と短くなってる。……無理をするなよイレイザーヘッド。」

「ツ!!」

イレイザーヘッドは死柄木を殴り距離をとる。その隙に残っているチンピラ共が攻撃するが返り討ちにあう。

「イレイザーヘッド……あんたの個性じゃ集団との長期決戦には向いてない。それを踏まえても真正面から飛び込んで来るのは生徒を安心させるためか？」

俺が尋ねるが当然ながらイレイザーヘッドは答えない。

「かっこいいなあ。かっこいいなあ。……ところでヒーロー」

死柄木は起き上がりながらイレイザーヘッドに告げる。

それと同時にレーザーヘッドの背後に黒い影が現れる。
「本命は俺たちじゃない」

黒い影の正体は……今回の襲撃の切り札。

対 平和の象徴 改人 【脳無】だった。

絶望の始まりである。

雄英襲撃 VSクオイオ

土砂ゾーン

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・。」

「雄英の生徒で強力な個性を持っていても・・・所詮は子供・・・個性の使い方が大雑把だな。」

土砂ゾーンでは轟とクオイオの闘いが行われていたが現状ではクオイオの方が優勢だった。

(クソ。コイツの個性がよく分からない上に明らかにさつきまでの有象無象とは違いすぎる。)

轟の個性、【半冷半熱】は文字通りの半分冷気、半分熱気といった強力な個性である。

しかし、轟は今のところ半冷の能力しか使っていない。それでも強力な個性であることには変わりない。

それでも戦闘経験に差がありクオイオに苦戦している。

轟は何度目になるかわからない冷気でクオイオを凍らせる。

しかし、クオイオの身体は一時的に凍りはするもののすぐに白い煙を上げ蒸発する。

「無駄だ……お前の個性はこのクオイオには効かない。」

「ツ!!・・・クソツ!!」

(「まただ!凍らせては瞬時に解凍していきやがる。発熱系の個性だと思っていたが……」)

「暗転」

ズウウウウ

クオイオが言葉を発するとクオイオの身体が少しずつ消えていく。

そして轟の身体の所々から痛みが走り出した。

「ツ!! (これだ!!透明化の能力で何処から攻撃してくるかわからねえ!!)」

轟は姿の見えないクオイオの攻撃を何とかガードしながら対処法を練っていると…

「轟くん!!後ろ!!」

轟に向けて何処からか声がかげられその声に轟は従い後方に攻撃をした。

「っ!?!」

姿は見えないが微かに手ごたえを感じた轟は再度攻撃するが今度は空を切った。

「次は右!!」

再びの指示に轟は個性を発動し、攻撃する。

すると攻撃した場所には姿は見えないが確かに人型の氷の氷結跡がそこにはあった。

轟はその氷結から声を発せられた方へと距離をとった。

「さっきの声………葉隠か？」

「うん！そっだよ！轟くん！」

声の正体は同じクラスの少女、【透明】の個性を持つ葉隠透だった。どうやらここに飛ばされたのは俺だけじゃなかったみたいだ。

……凍らすとこだった。危ねえ……。

ふと、轟はあることに気付く。

先程の葉隠の指示通りに動いたらクオイオに攻撃できたことを。

「葉隠。アイツの居場所がわかるのか？」

「わかんない！」

葉隠の答えに轟は表情は崩していないが内心どうしようかと戸惑っている。

「でもね、あの人の透明化と私の透明とはなんとなく違ってただけで違っていて感じるの。」

「?同じじゃないのか。」

「うん。私の透明と違ってあの人は透明というより・・・何だろう、タコとかカメレオンみたいな周りの景色に同化してるみたいな感じ・・・かな?」

「タコ・・・カメレオン・・・擬態か?」

「うん。そんな感じ!あくまで私からの視線だけ。」

轟は葉隠の答えに考え込む。

この状況で葉隠の存在は重要だった。

自分には見えない敵も彼女なら大体の位置がわかる。

その上おそらくだがクオイオにも葉隠の存在は予想外だったはず・・・

(アイツの透明化が葉隠と違って周りとの同化・・・擬態だと考えると・・・・・・発熱系に擬態)

轟はこれらのことからクオイオの個性について改めて解析していく。

（擬態つてのは身体の皮膚を周りに似せるってことだよな。．．．．．発熱も皮膚関係のものがある．．．）

「アイツの個性は皮膚ってことか。」

「正確には表皮だ．．．!!」

『!!』

いつの間にか氷結から脱出したクオイオが自身の腕を黒光りする鉄のように変化させて振りかぶっていた。

轟と葉隠は間一髪かわしたが、クオイオが殴った跡は今までとは破壊威力が違いその場に小さなクレーターが出来上がっていた。

「今までその赤白髪のがキだけだと思っていたが．．．．．まさか他にもガキがいた

とはな。・・・声だけするということは、透明化の個性持ちか。」

クオイオ：仙堂皮鉞／せんどう ひかわ

個性：表皮

皮膚の表面を硬化や発熱させたり色素を変化させ周囲と同化することができる。

ただし、周囲に同化しながら硬化や発熱といった同時発動はできない。

発熱はあくまで体温操作なので体温の上げ下げするだけなので炎や氷を自ら出すことはできない。

・・・あくまで今の状態だったらの話だが。

「しかし、俺は・・・このクオイオは負けん。貴様の氷結も熱化させた表皮の前では無意味だ。透明の個性持ちが俺の居場所を把握できても俺を捕らえることは出来ない。」

クオイオの言葉に轟は舌打ちをするが焦らず冷静になる。

確かに、居場所が分かっても凍らせた所で熱化で瞬時に溶かされて拘束することはできない。

姿が見えない葉隠でもクオイオを捕らえ続けることは出来ない。

ハッキリ言って打つ手がない状態だった。

「轟くん。あのさ……」

轟がどうやってこの状況を打破するか考えていると葉隠が轟に耳打ちする。

「!……出来るのか? 葉隠。」

「やらないよりはやってみようと思って……」

「……やってみるか。頼む葉隠。俺もやるだけやってみる。」

「うん! よろしく、轟くん!!」

何やら策ができたようだがクオイオは特に警戒することはなかった。

轟と葉隠がどんな策を出そうが自分には問題ない。すべてねじ伏せると自信を持っている。

「何をしようと俺には効かん。せいぜい無駄なあがきをしてみろ！」

クオイオが今度は全身（服は除く）を硬化させて轟達に突っ込んでいった。迫ってくるクオイオに轟は再度氷結させて距離をとる。

しかし、今度は熱化し氷結を解き、再び迫る。

再び轟はクオイオを氷結し、きよ距離をとる。

クオイオもまた熱化した身体で氷結を解き迫る。

これを繰り返し続ける。

そうして馳ごっこは続いていく。

「策があるようだが俺には効かん。大体、逃げてばかりじゃヒーローなんてなれんぞ。」

「……そうかもしれないな。……けどな、ただ逃げてたわけじゃねえよ。」

「……やはり何らかの策があるようだな。面白い！ 貴様らの策などねじ伏せてやる!!」

「なら・・・やってみろ!・・・葉隠!! いいか!？」

「うん! いくよ!!」

轟の声に葉隠は答える。

そうしたら、さつきまで轟に迫っていたクオイオの動きは急に止まった。

「!?・・・身体が!?!・・・これは・・・ワイヤーか!!」

動くことができないクオイオは自身の身体を見てみると身体のあちこちにワイヤーが絡まっていることに気付いた。

「なるほど。さつきから距離をとっていたのは俺の身体にワイヤーを絡ませるためか・・・だがな、こんなワイヤーなんぞ熱化した俺には無意味だ。」

クオイオはそう言って熱化してワイヤーを焼き切ろうとする。

しかし、クオイオに絡まったワイヤーは焼き切れることはなかった。

「何!?! 焼き切れないだと!?!」

「そのワイヤーは簡単には切れないし熱や火に強い素材で作つてあるの!! それに! 轟くんが動き回つてくれたお陰で貴方の身体に複雑に絡まつてるよ!!」

「あんたは自分の個性と力に過信し過ぎたんだよ。」

クオイオは轟の言葉に苦虫を噛み潰したような顔をしたがすぐさま冷静になる。

「……それで? この後はどうするつもりだ? 俺を凍らせるつもりか?」

「……そのままであんたの動きを封じられるとは思っていないからな。他の奴等より厚めに凍らせるつもりだ。」

「凍らせる……か。俺を殺しはしないのか?」

「……放っておけば壊死していくだろうが、殺す気はない。」

「……ヒーローとして……か？」

「？当然だろ。」

クオイオの質問に轟は答えていくが、質問が終わるとクオイオはクククツ……と笑い、轟と葉隠は不気味に感じ、距離をとる。

「ヒーローとして当然……か。……クククツ……あまい、あますぎな、ヒーローの卵共。……ヒーローとて人の子。殺意に憎悪に憎しみ……数えだしたらキリがないが、必ず感じるものだ。平和の象徴であるオールマイトも例外ではない！」

クオイオの言葉に思い当たる節があるのか轟は苦い顔をする。

「ヒーローとて殺すことはあるぞ。……どうするかは貴様らの自由だが……こ

ここで俺を殺さないなら後悔するぞ。 . . . あの時、動きを封じるだけじゃなく、殺しておくべきだった とな。」

轟は自身の中に蠢く不快感を抑え、クオイオを氷漬けにした。その後、やり遂げたが何処か腑に落ちない空気が轟と葉隠との間に流れた。

「あ、あの、轟くん」

「 気にするな。所詮はヴィランの戯言だ。 俺は中央広場に向かう。葉隠は出口に向かえ。」

「え!?! 危ないよ!!」

「こいつらから得た情報を相澤先生に伝えてくる。こいつらの好き勝手にさせとくのも気に入らないからな。」

葉隠の静止を無視し、轟は騒ぎの中心であるセントラル広場に向かった。

雄英襲撃 VS シキガミ

山岳ゾーン

ビシツ!!ビシツ!!ビシツ!!

「いつまで逃げ続けるつもりだシ!!」

シキガミの猛攻に八百万は自身の個性で創造した刀で受け流し、耳郎は必死になってかわしていた。

(雄英生徒とはいえイヤホン女の方は大体想像通りの行動だシ。問題は・・・)

シキガミは八百万の事を睨む。

八百万は先程からシキガミの攻撃を受け流しているが、時には切り裂いてもいる。シキガミからしたら気に食わないだろう。

（あつちの創造女だシ。多分エリートタイプだと思うけど明らかにイヤホン女と違いきるシ。多少は腕があつても空想と実際の戦闘は違うものだシ。．．．．．けど。）

八百万のことが気に入らない反面、シキガミの中で好奇心が徐々に湧き上がってきた。

（気に入らないけど．．．．．倒しがいがあるつてもんだシ。!!）

シキガミは思わず嬉々とした表情になる。

（おっと．．．今の状況で喜び過ぎるのは危ないシ。）

シキガミは口元を押さえ嬉々とした感情を抑える。

再び緊迫した空気が流れ、戦闘が再開しようとしたその時．．．

「ウエイ!?!」

個性を使い頭がショートした戦力外の上鳴のこの場に水を差すような間抜けな悲鳴が聞こえてきた。

『!?!』

「動くなよ。個性も禁止だ。使えばこいつを殺すぞ。」

見てみると上鳴が一人のヴィランに捕まっていた。

「上鳴さん……!!」

「やられた……!!あの女の攻撃を避けるのに必死で油断してた……」

「お前……あの電撃から逃れてたのかシ。」

「地中に身を潜めてたんで電撃から逃れたんつスよ。……さてと、同じ電気系個性としては殺しはしたくねえが……しょうがないよな。」

「ウエ．．．ウエ．．．イ．．．」

ヴィランの指から電気がバチバチと音を立てて上鳴にギリギリ当たらない距離で構えている。

「全滅させたと思わせてからの伏兵と人質．．．．．こんなことも想定できていなかったなんて．．．」

「電気系．．．！恐らく轟さんの言っていた通信妨害している奴ね．．．！」

八百万と耳郎は今の状況に悔しがるが後の祭りである。

「シキガミの姐さん。これでこいつ等は妙な真似は出来ませんぜ。」

「．．．．．」

ヴィランの言葉にシキガミは答えることはなかった。

しかし、先程の嬉々とした感じはなく無表情で八百万・耳郎とヴィランを見ていた。

「……上鳴もだけどさ……電気系つてさ。【生まれながらの勝ち組】つてやつじゃん？」

「あ？」

「耳郎さん何を……」

「だつてさ。ヒーローでなくてもいろんな仕事あるし引く手数多じゃん。いや純粋な疑問ね？何で敵—ヴィランなんかやってんのかなつて……」

耳郎はヴィランに見えないように自身の個性【イヤホンジャック】のプラグを自身のブーツのスピーカーに伸ばしていた。

「！なるほど！耳郎さんならプラグさえつなげればノーモーションで攻撃出来る！シキ

ガミからの攻撃を私が出来ただけ抑えられれば上鳴さんを救える!!)

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・おい。気付かれないとも思ったか？」

「ウエイ!!」

ヴィランは先程より強い電気を出し、耳郎を睨みつける。

「くっ!!」

「子供の浅知恵など馬鹿な大人しか通じないさ。ヒーローの卵が人質を軽視するなよ。お前達が抵抗しなければこのアホ面は見逃してやるぜ？他人の命か自分らの命か……！さあ……動くなよ……」

ヴィランの言葉に恐怖を感じる耳郎。八百万も恐怖を感じてはいるがあの時の中身の恐怖に比べれば軽いものだった。

しかし内心焦っていた。

これで自分達は下手に動けない上にシキガミからの攻撃をまともに受けるからだ。シキガミ以外のヴィランだったらうまくいけば何とかなるチャンスは幾つかあっただろう。

だけどシキガミは他のヴィラン達とは明らかに違うものだった。

「シキガミの姐さん。後はこいつ等を好きにしてください。」

「……………ああ。わかったシ。」

シキガミが再び静かに動き出したことに二人は諦めかけた。しかし……………

ビュ!! ドカツ!!!

「グハアアアアア!!?」

「ウエ!?!」

『!?』

この場にいる全員が予想していた結果とは全く違う結果となった。

シキガミが攻撃したのは八百万と耳郎ではなく、人質を取っていたヴィランだった。

シキガミの攻撃をもろに受けたヴィランは上鳴を掴んでいた手を放し、ぶっ飛んだ。

自分達に攻撃が来ると思っていた二人は呆然とし、攻撃をした本人であるシキガミを見た。

当の本人はどこかスッキリした感じの空気を漂わせている。

「全く・・・余計なことをするんじゃないシ。・・・そのイヤホン女！サツサとその間抜けバカ面を連れてどつかで守ってるだシ。邪魔でしようがないシ。」

「え!?! あ・・・わ、わかった。」

指名された耳郎は驚いたが言われた通りに上鳴を連れて近くの岩場に向かった。

「さて、これで邪魔する馬鹿はいないシ、足手纏いもないシ。．．．続きを始めるシ。」

シキガミは再び戦闘態勢をとる。

そんなシキガミに八百万は尋ねる。

「どうして味方を攻撃したのですか？あのままでしたら確実に私達を倒せたでしょう。」

八百万の質問にシキガミはハアとため息を吐きながら答えた。

「つまらないこと聞くなだシ。いいか。確かに人質という手は有効だシ。ヴィランどころか時と場合によつてはヒーローもするシ。でも、そんなことをして得た勝利なんて勝利とは言わないだシ！まあ、どのみちウチはお前たちを倒してリライト様にウチの勝利を捧げるんだシ。」

そう言うときキガミが纏っている羽衣が八百万に狙いを定める。

「ウチのやり方でね!!」【攻式：舞獅子】!!」

シキガミから繰り出される羽衣の容赦ない攻撃が八百万を襲う。
八百万がいる場所から土煙が舞う。

「百!!」

耳郎は八百万の名を叫ぶ。

耳郎は八百万がやられていると思った。

土煙が次第に薄くなりシルエツトが見えてくる。

『!!』

土煙が晴れると八百万がシキガミの攻撃を全て切り裂いている姿が現れ、予想外の出来事に驚く耳郎と驚きはしたものの八百万の行動に再び嬉々とした感情がこみ上げてくるシキガミ。

「あなたみたいな人がヴィランなのはとても残念です。ですが、私達はヒーローを目指している身・・・ここで負ける訳にはいきません！あなたを倒して・・・理央の元に行つて、理央を止めてみせます!!」

「・・・なんでお前がライト様の名前を知っているかはお前を倒してからじっくり聞きだしてやるシ。」

シキガミがそう告げると羽衣の一部がシキガミの右腕に巻き付き今までの羽衣での攻撃形態ではなく羽衣の剣という攻撃形態へと変化した。

「ウチは別に羽衣を鞭のようにするだけの馬鹿の一つ覚えの個性じゃないシ。」

シキガミ：紙季織紙御莉／しきおり しおり

個性：式帯（しきおび）

自身が身に纏っている帯や反物・紙を自由自在に操る個性。

材質・強度・形状も自由自在。

しかし、洋服や着物といった完成された服は操れない。あくまで帯や反物状の物しか操れない。

自身が身に付けたり持っていない帯や紙・他人が持っている帯や紙、市販などで売っている状態のやつは操れない。

「お前には今までのスタイルじゃ倒しにくいからこれで殺つてやるシ。」

「臨むところです！」

向かい合う二人の間には見えない気迫が漂う。

離れたところから二人を見守る耳郎は二人からの緊迫した空気に息を？む。

少しずつ時は進んでいくがまだ二人は動く気配はない。

「ウ、ウエーイ……」

カツ!!

シユン!!

上鳴のこの場に相応しくない間抜けな声が漏れた瞬間、シキガミ・八百万の姿は同時に消えた。

キンツ！

キンツ！！

キンツ!!!

耳郎の耳に聞こえてきたのは互いの武器をぶつけ合う音。音は次第に強くなってゆく。

キンツ
!!!!!!!

そして最後の音が鳴り止み、二人の姿が互いに背中合わせで現れた。

「……………今更だけどお前名前は？」

「……………八百万百……………ヒーロー名はまだありませんがいずれヒーローになる者ですわ。」

「・・・・・・・・八百万。今回はウチの負けだシ。でも・・・・・・・・」グラア

シキガミの身体がゆつくりと倒れこんでゆく。

「次は・・・・・・・・ウチが・・勝つシ。」ドサツ

シキガミが倒れた後に八百万は息を切らし膝を付いた。

「ハア・・・・・・・・ハア・・・・・・・・ハア・・・・・・・・」

「百!!」

勝敗が決し、耳郎が八百万に駆け寄る。

「ハア・・・・・・・・ハア・・・・・・・・やりましたわ。」

「うん．．．うん!!」

八百万が勝ったことにより耳郎は安心感のあまり涙を流す。

「そう言えば．．．百。さつきシキガミが言ってたことつて．．．。」

「．．．ええ。今回のヴィラン襲撃の恐らく主犯メンバーの中に．．．私の幼馴染の姿がありました。」

そう言うのと立ち上がろうとする八百万を耳郎は止めようとするがさつきの八百万の覚悟と散り散りになる前の八百万の表情を思い出し声を抑える。

「．．．行つてきなよ。百。」

「!!」

八百万は耳郎の言葉に驚き耳郎を見る。

「……つきり止めるものと思っていましたわ。」

「本当は止めたいけどさ、それでも行かなきゃならないんでしょう？」

耳郎は苦笑いしながら八百万を起こし、トンツと背中を押し、ただし……と付け加える。

「絶対戻ってくること！。入学してそんな経たずに一人クラスメイトがいなくなったなんて御免だからね!!」

「……ハイ!!」

ニカツと笑顔で送り出す耳郎の顔を見て八百万は元気よく返事をして理央がいる中央広場へと向かった。

（待っていてください。絶対に貴方を止めて・・・取り戻して見せます。理央!!）

雄英襲撃 VS ペイバック

倒壊ゾーン

「・・・・・・・・」

「ハア・・・ハア・・・ツ!!クソが!!」

「コイツ・・・・・・・・強え・・・!!」

倒壊ゾーンでの爆豪・切島ペアとスキンヘッドの男、ペイバックとの戦いがおこなわれており、息を切らしている二人に対してペイバックは全く息切れしていなかった。

「・・・つまんないな。これが雄英の生徒の実力か・・・・・・・・さっさと倒し戦利品を貰ってリライト様の元へ行くか。」

「ッ!!この!!クソハゲ野郎が!!」

ペイバックの言葉に元々キレやすい爆豪が更にブチギレて声を荒げてペイバックに向かつて行った。

切島の静止を聞かず自身の個性でペイバックに攻撃するがペイバックはその攻撃を避けることなく逆に掴みかかる。

爆豪の個性である爆破はペイバックにしつかりと爆発し発動した。

爆発はしたが対するペイバックは爆煙の中、怯むことなく勢いも止まらず爆豪の顔面を掴み、隙だらけの腹部を容赦なく蹴る殴るを繰り返した。

「ッ!!」

ペイバックの打撃に爆豪は一瞬怯み、ペイバックはその一瞬を見逃さずさつきまでの攻撃より強力な一撃を喰らわせる。

それにより爆豪は後方に吹っ飛ばされた。

吹っ飛ばされた爆豪と入れ替わるように切島が飛び出しペイバックに攻撃していく。

自身の個性である硬化を使用した両腕で何度も攻撃をしていくがペイバックは余裕

でかわしてゆく。

「纏めて返すぜ。」

ペイバックは切島にそう言い切島の攻撃の動きに隙ができた瞬間に切島に掌を向ける。

その掌には笑った顔の痣があり、その痣の口の部分からボボボ・・・と音がしたかと思うと赤く光出し・・・

「三倍!!」 BOOOOOM!!

ペイバックがそう答えると同時に強烈な爆破が痣から発動した。

「グワアアアア!!?」

切島は硬化で普通の人より撃たれ強く防御力も高い方でもあるが、ペイバックからの爆破を至近距離で、しかもモロに喰らってしまったため爆豪の所まで吹っ飛ばされた。

「クツソがああああ!!」

雄叫びを上げながら再び爆豪がペイバックに向かってゆく。
対するペイバックは先程同様に爆豪の個性攻撃を避けることなく肉弾戦を繰り広げていく。

吹っ飛ばされた切島も起き上がり再度ペイバックに向かって行き爆豪と共に攻撃をする。

爆豪と切島の二人からの攻撃をかわしてゆくペイバックは無表情な表情が少し歪み小さな舌打ちをし、二人から距離をとる。

「クツソ!!あの野郎、爆豪の攻撃は避けて攻撃。俺に対しては個性で攻撃かよ。」

「ちげーよトゲ頭!アリヤ俺の個性だ!!」

「ハア!?似た個性のダダ被りじゃなくてか!？」

「あのハゲ野郎は俺の個性を肌が露出している部分にある痣で吸収して放出してんだよ!!」

「マジかよ!!? だからオメーの攻撃はあまりガードしてねーのか!!」

爆豪がペイバックの個性能力を切島に説明され驚愕する切島。

一方でペイバックは爆豪に感心する。

「(猪突猛進・自己中・戦闘狂の塊なみみっちい奴かと思っていたが所々の格闘センス・個性把握・拳句の果てに一発目の爆破からこれまでの爆破の威力が違うところを考慮すると自身の個性調整に繊細さ……個性の力押しだけで雄英に入ったわけじゃないみたいだな)……見かけによらず意外に考えてるんだな。」

「んだとこのハゲ野郎が!!」

相変わらず沸点の低い爆豪を切島は落ち着けと抑える。

ペイバック：吸疽渴／すいかき　かつ

個性：吸引疽

相手の個性による攻撃を吸収して使用することが出来る。

同じ攻撃を溜めることでまとめて使用することができる。

疽の為、肌が露出している個所にしか吸引疽は現れない。よって衣装の上や衣装の下には出ない。

吸引疽は露出している肌の範囲だけ数を増やせる。

吸収には限度があり放出しなければ吸収できなくなる。

複数の個所から吸収は出来るが放出は出来ない。

「・・・俺の個性を多少理解したつもりだろうが関係ない。」

ペイバックは焦ることなく冷静に深呼吸して力を籠めると身体のいたるところから吸引疽が現れる。

「お前らを倒して、戦利品を頂いて、リライト様の元へ行くだけだ」

静かに冷たくも先程までとは違い殺気の籠った視線を二人に向けた。

「ツ!!ヤベエ・・・さつきとは空気が全然違うぜ・・・!!どうするよ爆豪!!」

「騒ぐなトゲ頭!!関係ないのはこっちも同じなんだよ!!」

ペイバックの殺気にたじろぐ切島に対して爆豪はたじろぐどころかニイイイと口元が緩み無邪気な笑みを浮かべていた。

まるで楽しめる玩具を見つけた子供のように・・・

「ブツ殺す!!」

今にも飛びかかりそうな爆豪に切島が待ったを掛ける。

「待てって爆豪!!元々ヴィランっぽい笑いが滅茶苦茶ヴィランの笑いになってるゾ!!」

「テメーからブツ殺すぞ!!!」

「んな事より、オメーアイツを倒す対策も無しに突っ込もうとするなよ!? さっきみたいな攻防は通じねえぞ!!」

「対策ならあるわポケエ!! ちよつとツラ貸せや!!」

爆豪は切島を強引に引き寄せ策を伝える。

策の内容に驚愕する切島は考えるがこの策以外良いアイデアはない。

「オツシヤ! 分かった! その策にノったぜ爆豪! 早く倒して広場に行こうぜ!!」

「俺に指図すんな!! 足引つ張んじゃねえぞクソ髪!!」

爆豪がそう怒鳴るとペイバックに向けて籠手を向けピンを引き抜いた。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

!!!!!!!

爆破の個性とコスチュームの構造による先程までとは比べられない強大で強力な爆破が炸裂した。

ペイバックのいた場所は爆煙に包まれて何も見えない。

普通なら無事では済まないはずである。

だが………

D A S E !!

「馬鹿の一つ覚えなのか？それとも悪足掻きか？どちらにしる無駄な足掻きだな。」

爆煙は全て吸引痕に吸収されペイバックは爆豪達に向かってゆく。

「どれもチゲエよ!! テメーをブツ殺すための一撃だボケが!!!」

「!!」

対する爆豪もペイバックに向かって行く。

「死ねヤヤアアアアアアアアアアアア!!」

轟音と共に怒涛の爆破のラッシュを繰り出し続ける爆豪に対しペイバックは吸引痘による吸収とガードで対応してはいるがさつきまでの吸収よりガードの方が目立ち始めた。

「テメエの個性が吸収系だろうが吸収できる量にだって限界があるんだろうが!!」

「ッ!!」

「だったら遠慮なく吸わせてやるよ!! テメエがくたばるまでなああああ!!」

「(コイツ! 本当に見た目によらず冴えてやがる!! だが!!)」

ガードしていたペイバックは爆豪に蹴りを入れ距離を取り、爆豪に手を向ける。

「ここにお前に今迄の攻撃を纏めてお前に返せば済む話だ!!……フルバースト!!」

ドオオオオオオオオオオオンンンンンンンンンンン
!!!!!!!

ペイバックから放出されたこれまで蓄えた爆破の爆音が響き渡る。

ペイバックは一気に放出したので爆破の反動で壁に叩きつけられた。

「痛ッ!!……大した威力だな。これで残機ゼロだn」この時を待つてたぜ／たんだよ
!!」ツ!!?」

爆煙が少しずつ晴れて行き姿が確認出来る状態になり爆豪と切島の姿を確認すると
爆豪の籠手の前に切島が全身を硬化し腕をクロスした状態で構えていた。

「ブツ飛ばせ!!爆豪!!!」

「俺に指図すんじゃないやねえ!!!」

切島の合図に爆豪が強力な爆破を起こし全身硬化した切島をパイバックに向けてぶっ飛ばした。

『ハードニングロケット!!!』

物凄い勢いとスピードで向かってくる切島をかわそうとしたいがさっきの自身の攻撃の衝撃で思う通りに身体が動くことが出来ず、個性もガス欠な上切島相手に発動しても意味がない。

パイバックは今の状況が完全に詰んでしまっていることを理解した。

「ツ!!・・・クソがあああアアアアアアアアアアアア!!!」

パイバックの怒りの叫びも虚しく、飛んでくる切島の攻撃をモロに喰らった。

「ガッ・・・・・・・・!!! (俺が・・・・・・・・こんなガキ共に・・・・・・・・)」

雄英襲撃 VS ジャンパー

入口

「13号。災害救助で活躍するヒーロー。やはり戦闘経験は一般ヒーローに比べ半端劣る。」

「あーらら。自分で自分をチリにしてやんの。」

「先生——
!!!!」

悲痛な叫びが響く。

(ワープゲート！やられた・・・!!)

状況整理すると黒霧とジャンパーに13号の個性である【ブラックホール】で残った

生徒達を守ろうと発動するも黒霧の「ワープゲート」で背後にゲートを開きブラックホールの吸収を逆に自分を吸収してしまう結果になってしまった。

「飯田ア!! 走れって!!!」

13号が傷つき、残った生徒が焦り・呆然・不安といった感情の中一人の生徒が飯田に指示を叫び急かした。

「くそう!!」 DRRR

飯田は個性「エンジン」で入口へと猛ダッシュする。

しかし、そんな飯田をほっとく訳もなく・・・

「散らしもらした子供・・・」

黒霧・ジャンパーを含め、ヴィラン連合の目的はあくまでオールマイイトのみ故に・・・

「他の教師達を呼ばれてはこちらも大変ですので・・・」ズツ

「出すわけにはいかねえな。」シユン

飯田の目の前に黒霧のゲートを開き、その横にジャンパーが移動する。
このままだと飯田自ら黒霧に飛び込んでいく形になってしまう。

（皆を・・・僕が！任された！クラスを！！僕が！！）

ガバ！！「行け！！」

バツ！！「早くしろ！！」

「！」

飯田が黒霧に突っ込む直前に障子が黒霧の靄部分を自身の巨体で覆い被さり飯田の

突っ込みを防ぎ、近くにいたジャンパーの前には砂藤が立ちほだかり、飯田への接触を防いだ。

「くそっ!!」「チツ!!」

二人の妨害に悪態をつく黒霧とジャンパーを背に猛ダツシユする飯田。

自動ドアまであと少しと迫る飯田に対し妨害されたとは云えそう簡単に諦める黒霧とジャンパーではなくすぐに飯田に追いつき再び飯田の前に立ちふさがる。

「生意気だぞメガネ．．．!」「外には出さねえって言ってるだろ!!」

「消えろ!!」

飯田を包み込もうとする瞬間、黒霧の身体が突如突っ込む飯田から離れ、ジャンパーの身体にテープが巻き疲れる。

「!?!」

「!!」

拘束されているジャンパーが黒霧に向かって叫ぶ。

そんなジャンパーを逃がさまいと瀬呂は踏ん張るがジャンパーはそんな瀬呂を睨み付ける。

「テメーも来い!!クソガキ!!」

そう叫ぶとジャンパーと瀬呂の姿が同時に消えた。

USJから雄英への道中

飯田はガムシヤラに雄英校舎、職員室、先生、ヒーローへと向かい走り続けた。自分に託してくれたクラス皆の為に。

アアアアアアアアアアアア……

ふと、何処からか声が聞こえてくることに気付き、飯田は足を止め辺りを警戒する。しかし、警戒して辺りを見渡すもヴィランらしき姿は全然見えない。

それでも声は確かに聞こえ、それが徐々に近づいている。

そして飯田はその声の周りでなく上空から聞こえてくることに気付いた。

そこで飯田は上空を見上げるとそこに黒い影が徐々に近づいてくる事に気が付いた。

その影をヴィランと思い身構える飯田だが影の姿を正確に認識できる距離になり飯田はギョツとした。

落下してくるものはヴィランではなく同じクラスメイトでUSJにいるはずの瀨呂範太であった。

「!? 瀨呂君!?!」

「飯田アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

何故瀨呂が上空から落ちてくるのか解らなかったがこのままでは瀨呂が多々では済

まない。というより死んでしまう。

飯田は落下してくる瀬呂に向かって走り出し、瀬呂をキャッチする。

「瀬呂君!! USJにいるはずの君が何故空から!？」

「そ、それが俺も何が何だか………ッ!! アブネエ!!!」

瀬呂が何かに気付き飯田の身体を引っ張りその場から少し離れる。

離れるとさつきまでいた場所に数本のナイフが突き刺さった。

「ただでさえそのメガネのクソガキを外に出しただけでも失態なのにオールマイト以外のヒーローを呼ばれたらリーダーに申し訳ないんだよ。」

上空から声が聞こえ二人は見上げるとそこには空中に浮いてナイフを構えているジャンパーが苛立ちながら殺意を向けていた。

「だからここで大人しく死んでおけクソガキ共。」